

[講演要旨]

三重県の地震・津波モニュメントの特徴について

新田康二(三重県立南伊勢高等学校・南勢校舎)

§1. はじめに

2015 年度科研費<奨励研究>「南海トラフ巨大地震関連石碑などの悉皆調査(三重県)」で、三重県内の地震・津波モニュメントの全容をほぼデータ化した2016年3月『科研費成果報告書』¹⁾(199pp)を発刊することができた。その後、2016年度末(実際は2018年4月)徳島県教育委員会によって『南海地震徳島県地震津波碑調査報告書』(徳島県埋蔵文化財報告書第3集)が発刊されることで、徳島県の現時点での全容が明らかとなった。また、谷川亘による科研費調査で「高知・徳島の地震・津波碑紹介サイト」[地震津波碑×デジタルアーカイブ]が2017年公開され、カラー写真で高知県36基・徳島県39基を詳細に知る事が出来る。また、和歌山県立博物館は、「県内に所在する災害記念碑一覧」(2015年1月31日更新)をHPにて公開し、2015年11月和歌山県立紀伊風土記の丘の特別展「紀伊の地、大いに震う～考古学から南海地震を追う～」の『図録』に64基のカラー写真が公開された。

かかる点で、三重県から高知県までの地震・津波モニュメントの比較研究が可能になりつつある。

§2. 三重県内の地震・津波モニュメントについて

地震・津波モニュメントの範疇をどこまでカウントするのか？未だ定まっていないと感じる。三重県以外の3県には余り見られない事例について概観したい。

1) 墓石について・・・46基

三重県内においては、地震・津波の文字が刻まれていなくても、地震・津波発生した年月日と、それに+戒名に「津波」・「潮」などが石碑に刻まれている場合は、それぞれの犠牲者の墓石であると判断しカウントした。宝永地震15基、安政東海地震8基、昭和東南海地震22基である。

2) 石灯籠・常夜灯について・・・のべ111基

「倒」と地震によって転倒したことを刻む事例は2例しかないが、「国家(家内)安全」・「五穀豊穰」などの地震・津波発生後の安心安全な社会を祈願したと考えられるイベント発生5年以内に建立された石灯籠・常夜灯をカウントした。翌年春までの建立の事例が多いのは、1854年の伊賀上野地震・安政東海地震の事例である。また、転倒の伝承・口碑のあるモノもカウントした。文書の残存する事例がなく歴史学的には問題性があるが、民俗学的に、地震・津波関連のモノだと認定が可能だと考えた。

3) 庚申塔(青面金剛立像)について・・・3基

地震・津波が発生した翌年月までの建立年月を台座に刻む事例が多く、基本的に1707年の宝永地震・津波に関連する事例である。三重県の海岸部では現在でも信仰対象となっている庚申塔が多くあり、紀年銘がないが、津波とも関連があると考えられる。

4) 地蔵菩薩立像(座像)について・・・24基

幼児・子どもの供養碑として、1707年の宝永地震・津波の犠牲者の事例と思われる17基、南伊勢町河内のトンネル東口に立地する事例は、津波遡上高38.2mを証明すると考えられる。

§3. 3県(和歌山県・徳島県・高知県)との比較

三重県内の地震・津波モニュメントとして特徴的な事例を紹介したが、和歌山県・徳島県・高知県においては、それぞれどのくらいの事例があるか？以下に紹介する。

1) 墓石

和歌山県～2基、徳島県～0基、高知県～2基

2) 石灯籠・常夜灯

和歌山県～0基、徳島県～3基、高知県～0基

3) 庚申塔(青面金剛立像)

和歌山県～0基、徳島県～0基、高知県～0基

4) 地蔵菩薩立像

和歌山県～0基、徳島県～2基、高知県～2基

かかる点で、和歌山県・徳島県・高知県においても、1946年の昭和南海地震・津波に関しては、墓石が皆無なのは明らかに調査していない事が如実であり、少子高齢化・先祖伝来の墓石化が進行している中で、墓石の悉皆調査を是非して頂きたいと要望する。

一方、民俗学的な手法による地震・津波に係る石灯籠・常夜灯の悉皆調査も要望したい。地震関係文書において、地震で倒壊した石灯籠何本という記載があっても、同定するのは難しい現実もある。

§4. おわりに

地震・津波モニュメントを同定しても、江戸時代の石碑の刻まれた字を読むことが難しく、できれば説明板の設置を望みたい。三重県内では599年の推古地震以降の地震・津波に関して、地震の説明板はのべ51基が立てられており、「災害文化」・「防災教育」に一定の役割を果たしている。

註 1)その後確認した地震・津波モニュメントに関しては、随時中部「歴史地震」研究懇談会の例会で報告し、年度末発刊の『中部「歴史地震」研究年報』にパワポ資料を掲載している。